

深く考える機会がほしい、 真剣に討論する場がほしい

三森ゆりか

ニューヨークの世界貿易センタービルで起こったテロ事件は衝撃的だった。世界中の人々がその悲惨な事件に胸を痛め、それに続く米国の報復攻撃が宗教対立に火をつけるのではないかと、そしてそれがより大規模な戦争につながるのではないかと、の危機感を抱いたことだろう。

私の教室には、つくば研究学園都市内を中心に約一五校の中学、高校の生徒たちが通って来ている。彼らに私は、今回のテロ事件、およびそれに続く一連の米国の対応や日本の対応などについて、学校で討論をしたかどうかを質問してみた。約三五名の中高生たちのうち、授業時間中に教師や級友との討論を経験していたのは二名のみ。教師が簡単に一方的に話をしたという生徒が数名。友人同士で話し合った生徒が一名。その他の生徒たちは、友だち同士で感想を述べ合った程度で、今回の事件について真剣に話し合う体験をもっていなかった。この結果は、私には少なからずショックだった。これからこの日本を背負って

立つ若い世代が、このような重大な危機に直面して真剣な討論の場をもたず、表面的な感想だけで通り過ぎてしまったら、いったいこの国に未来はあるのだろうか。

私が当時の西ドイツで暮したのは、七〇年代前半のことである。七二年にテルアビブ空港乱射事件とミュンヘン・オリンピックのテロ事件、七三年に第四次中東戦争と石油危機などが続いた激動の時代だった。私が当時通っていた公立の現地校では重大な事件が起こるたびに、歴史や社会学、ドイツ語の授業などを利用して、教師と生徒の間で激論がなされていた。西ドイツ国民として、どのような社会をつくり、どのような世界をつくるべきなのか、一人ひとりが危機感を抱き、本気で論じ合う様子に私はただ圧倒された記憶をもつ。

今回、史上最大規模のテロ事件に遭遇し、私は生徒たちと討論の時間をもちたいと考えた。そのためにも、冒頭に記したように彼らが学校で討論の時間をもったかどうかを私は確認したのである。結果は残念ながら無惨なものであった。これは、つくば研究学園都市周辺の学校だけの特異な現象なのだろうか。

私は、中学一年生、中学二・三年生、高校生の三つの

グループと「テロ行為の是非と米国の報復攻撃、日本の

米国支援、自衛隊の派遣」などについて話し合った。この討論を通して、私は一つの事実を確認もった。それは、中学生も高校生も、深く考え、真剣に討論する場を心から切望しているという事実である。討論の中で、彼らから多くの本音と不満が噴き出した。その多くは、テロ事件そのものに対してではなく、討論する機会を与えられなかったことに対する不満と憤りである。彼らは彼らなりに今回のテロ事件に深い衝撃を受け、自分たちの将来や地球の未来について大人や友人と意見を交換したいと望んでいた。しかし、その場が彼らには保証されなかった。なぜ彼らは、真面目に論じ合う機会をもてなかったのか。その理由を彼らは次のように分析した。

真剣に話そうとすると、級友にからかわれる／本気で話すと、周囲からいじめにあう／意見を言っても一人だけ空回りし、周囲から反応が全くない／考える機会がないので、考える能力が育たない／教師が生徒の意見をもっと引き出せない／感情論に終始し、理性的、

論理的に討論ができない／討論の場でもことがらに対する印象が述べられるだけで、根拠が明確

に述べられない。

中高生はさらに根本的な問題に言及し、日本の教育の在り方についても批判した。

日本の教育は教師が一方的に教え、生徒は丸暗記をするだけ。深く考え、議論する時間が保証されていない／総合学習は調べ学習で終わり、肝心の考えることを重視していない／日本の学校は、社会の情勢や世界の情勢に無関心。受験だけが重要。日本人には危機感がない。

私の教室の生徒たちが対象を分析し、根拠に基づいてクリティカル（建設的な批判的思考）に考えることができるのは、授業の中で訓練を受けているからである。議論は突然できるわけではなく、対象の分析の技術やクリティックに考える技術が身につけて初めて本当の意味で可能になる。また子どもにも議論の能力を獲得させるためには、適切な助言と問い掛けができ、なおかつ彼らに対してに扱って議論できる指導者の存在が重要である。機会さえ与えれば日本の中学生も高校生もこうした技術を身につけることができるはずだ。彼らに自分自身を、日本の未来を考える機会を教育現場で保証してほしい。

（つくば言語技術教育研究所）